

第3章

調査の結果と分析 ～調査から見えてくるもの～

第3章 調査の結果と分析 ～調査から見えてくるもの～

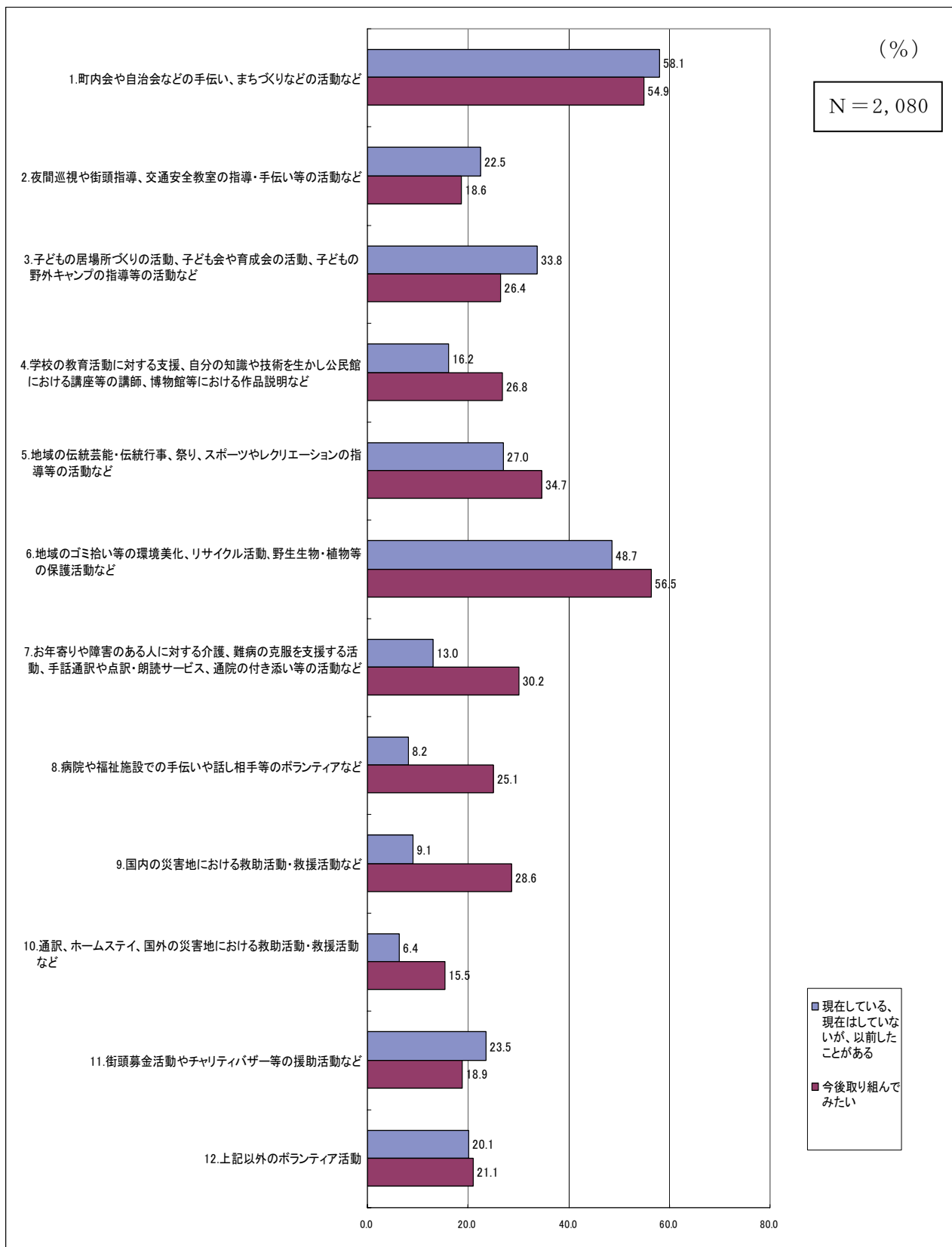
本章では、「団塊の世代」のボランティア活動の「いま」と「これから」について、調査結果から見えてきた特徴的なものを整理してみたい。紙幅に限りがあるので、以下の4点に焦点を絞って述べることにする。

1 これまでのボランティアとこれからのボランティア

図3-1は、現在またはそれ以前のボランティア体験と今後のボランティアの希望を見たものである。現在またはそれ以前に体験した活動で比率が高かったものを順に挙げれば、①町内会・自治会活動、②ゴミ拾いなど環境美化、③子どもの健全育成、④地域イベントの支援などとなる。今後やってみたい活動としては、①ゴミ拾いなど環境美化、②町内会・自治会活動、③地域イベントの支援といった顔ぶれは変わらないが、④福祉ボランティア、⑤災害ボランティアなどの分野が続いて上位に入っている。住んでいる地域に直接関わるボランティアに加えて、より広域で課題性が高いボランティアに目が向けられていることが見てとれる。

次に、現在またはそれ以前のボランティア体験の比率と今後のボランティアの希望の比率を比較してみよう。現在あるいは今までにやった活動の比率に較べて、これからやりたい活動の比率が10ポイント以上上がっているものをみると、学校支援・社会教育活動、福祉ボランティア、福祉・病院施設ボランティア、災害ボランティアがある。地域イベントの支援も今後やってみたい活動で比率が高い。

子どもの健全育成は、逆に今後やってみたい活動の方が比率が低い。自由回答の記述を読むと、今後にボランティアをしにくい要因として、体力の低下、健康不安、家族の介護などが目立っており、課題性の高い活動に関心があるものの、子どもの地域活動や野外キャンプに関わる活動などは体力的な面で躊躇があるようだ。ほかに、今後やってみたい活動で比率が低かったものには、町内会・自治会活動、巡回等の地域安全活動、街頭募金等チャリティ活動などがある。



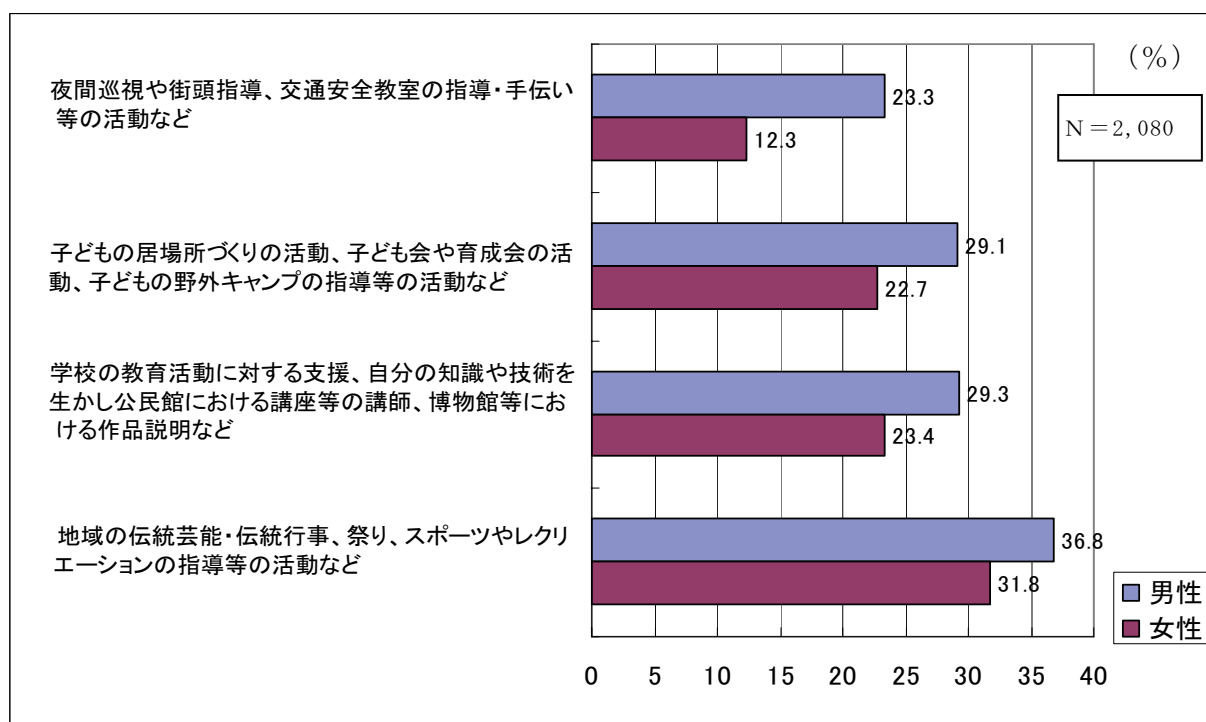
【図 3-1 これまでのボランティアとこれからのボランティア】

2 青少年の育成や生涯学習支援のボランティア

まず、「今後(退職後)ボランティア活動をやってみたい」という人が全体に占める比率を性別で見てもいい(図表割愛)。今後ボランティアをやってみたいという人は、男性で 52.6%、女性で 53.1%となっており、性別の差はほとんどなく、いずれもほぼ半数である。あとの半数はボランティアをしたくないと回答している。

今後ボランティアをしたくないという人にその理由を尋ねたところ、男性で比率が高かったのは、仕事が忙しい、他にやりたい活動がある、情報が足りないなどだった。また女性で比率が高かったのは、家族の理解が得られない、費用がかかる、人間関係に不安がある、事故などが心配などだった。

今後やってみたいボランティア活動について、その分野を青少年の育成や生涯学習支援のボランティアに限って見てみよう。図 3-2 をみると、いずれの活動分野でも、男性の比率が女性の比率を上回っている。とくに、巡回等の地域安全活動では性別で開きが大きくなっている。この巡回等の地域安全活動を現在またはこれまでにやったという人は、性別でほとんど開きがなかったが(どちらも 22%台)、今後希望する活動では女性の比率が大きく減少した結果、性別で開きが生じたと見られる。なお、図表は割愛するが、やってみたい活動で女性の比率が男性の比率を大きく上回ったのは、福祉ボランティア、福祉・病院施設ボランティア、災害ボランティアの分野だった。団塊の世代の男性には、青少年の育成や社会教育分野でのボランティアとして大いに期待できそうである。



【図 3-2 今後やってみたい活動 (青少年育成・生涯学習支援活動分野、性別)】

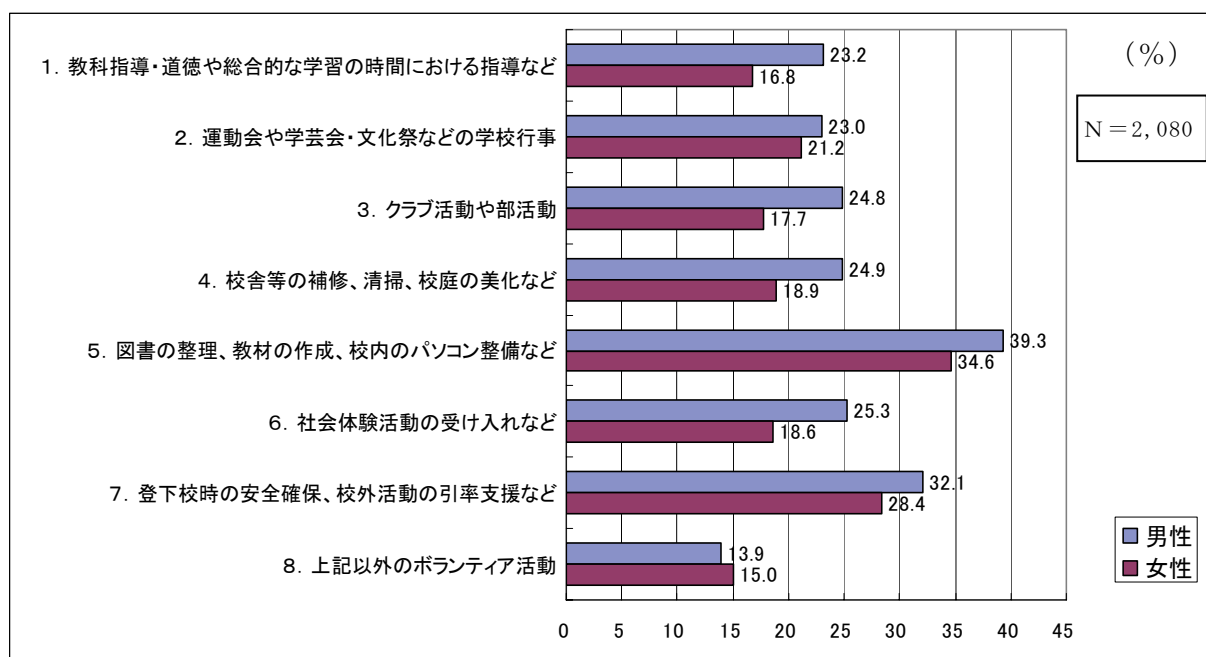
3 学校支援ボランティア

子どもの学校生活を多面的に支援するボランティアは、学校支援ボランティアと総称されることが多い。子どもの豊かな人間性を育むためにも、子どもの安全・安心の通学環境を守るためにもこの分野の活動に対する期待は高まっている。

団塊の世代全体で見ると、今後、学校支援ボランティアをやってみたいという人は、活動内容によって多少比率は異なるが、いずれも全体の約2割から3割となっている。

図3-3は、学校支援ボランティアの活動の希望を性別に見たものである。主な活動のいずれでも男性のボランティア希望者の比率が女性のボランティア希望者の比率を上回っている。とくにクラブ活動や部活動、社会体験活動の受け入れ、総合的な学習の時間等での指導、校舎の補修・清掃や校庭の美化などの分野で男性の希望が女性のそれに比べて高くなっている。ふだんは仕事中心の生活のために学校と縁遠いと思われる団塊の世代の男性であるが、今後のボランティア活動の場として学校を選んでいることから、子どもたちに温かい目が注がれていることが見てとれる。

学校支援ボランティアをしたいと思わない人は全体の7～8割に及ぶが、その理由を自由回答欄で見してみる。理由として、時間がない、他にやりたいことがある、健康不安があるなどが多く挙げられたが、これらのほかに「子どもがいないから」「学校との接点がないから」「子どもへの接し方がわからないから」といった、学校支援ボランティアならではの思いも多く挙がっていた。



【図 3-3 今後やってみたい学校支援ボランティア（性別）】

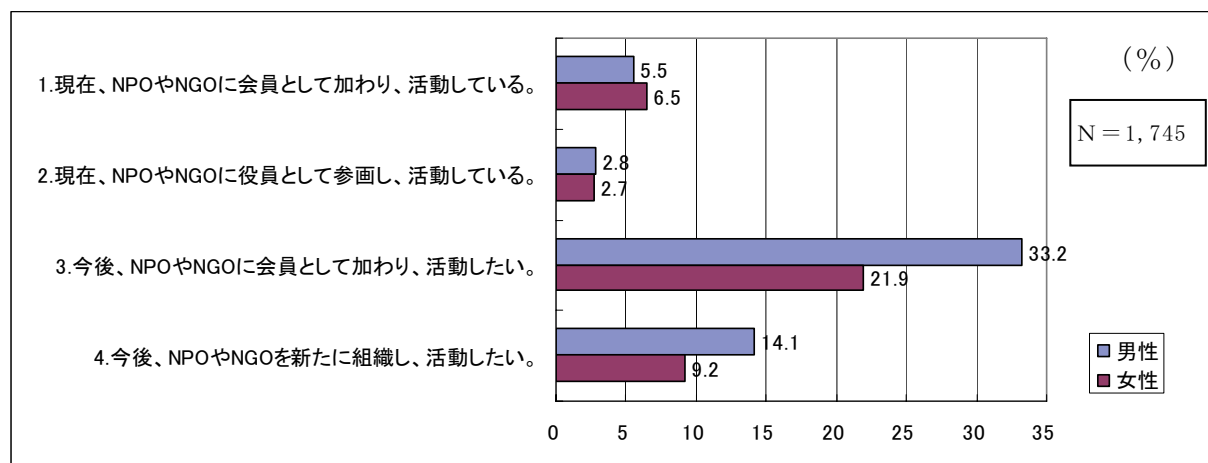
4 NPO活動の今後

平成10年に特定非営利活動促進法（NPO法）が制定されて以来、ボランティア活動などをはじめとする非営利活動組織は急速に発展し様々な事業を各地で展開するに至った。

平成19年1月末現在、認証を受けたNPO法人は全体で3万団体を越えた。本調査では、団塊世代のNPO・NGO活動について訊いている。図3-4はその結果を示している。

現在NPO・NGO活動を行っている人の比率は、性別ではほとんど差異が見られない。しかし、今後のNPO・NGO活動の希望で見ると、性別で大きな開きが見て取れる。NPO等の会員として活動したい男性は全体の約3割、それに対して女性ではその比率が約2割となっている。またNPO等の組織を新たに組織したいという人も、男性で高い比率となっている。

NPO・NGOは、かならずしもボランティアとしての活動を志向しているわけではなく、団体によっては、実際に活動を継続するために収益を挙げ、実働に対しては対価を支払うなどの事業体制をもつ。とくに団塊の世代の男性には、NPO等がもつ高い公益性と実働対価の考え方に対する共感があるように思われる。



【図 3-4 これまでとこれからのNPO・NGO活動（性別）】

調査結果の分析では、性別集計を主に用いたが、性別集計の傾向は、就労層・主婦層別の集計と同一の傾向があった。

調査の分析を通して、現在就労している団塊の世代の少なからぬ人々が、退職後の活動としてボランティア活動を視野に入れていることがわかった。また、現在ボランティア活動に目が向いていない人たちについても、適切な情報や活動のきっかけ等の条件次第ではボランティア活動に入っていく可能性が高いことも感触として手ごたえを得た。適切なタイミングで彼らの背中をポンと押しだしてあげられるような仕掛けづくりができないか。その手がかりを改めて得られたように思う。

(野島正也)